

第62回 戦後ブルース歌謡の女王 青江三奈の原点

私が「恍惚」という言葉を覚えたのは、昭和41年、中学3年の初夏の頃だったと思います。中間テストの期間中、早く帰宅して見た昼間のテレビで『恍惚のブルース』（作詞・川内康範）を歌っていた青江三奈のおかげです。

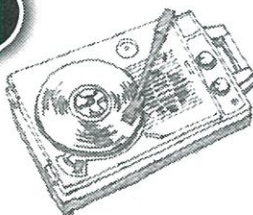
学校では決して教えてくれない世界を歌うブラウン管の中の青江が茶髪だったかどうか、番組自体がまだカラー放送ではなかったと思うので知る由もありませんが、私の知る青春歌謡を歌う若手スターとはまったく異なる熟女の歌に、初心的な中学生は恍惚とってしまったのでした。有吉佐和子の書き下ろし長編小説『恍惚の人』がベストセラーになるのは、それから6年後のことです。青江が世に出るにあたっては、二人の助っ人が存在します。レコードデビュー前の青江は本名（井原静子）を名乗らず、「鈴原志摩」という芸名を使っていました。が、「鈴」の字は当時、東京・大井町の狭いアパートで生活を共にしていた花札二の本

名（鈴木進）から拝借したものです。その後、花札二は作曲家として『国際線待合室』などを提供、スター歌

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本浦



手としての青江を支え続けます。青江のデビュー直前、『骨まで愛して』を大ヒットさせていた川内康範もまた、青江のために親身になって奔走します。「青江三奈」の芸名は、当時、川内が『週刊現代』に連載していた小説『恍惚』に登場する女性の名を与えたものでした。青江はデビュー後の2年間にシングル盤を9枚リリースしていますが、そのうちA面8曲の歌詞を川内が提供していることから、青江は川内が最も力を注いで支援した歌手だったことがわかります。

アルバム「冒頭」で『伊勢佐木町ブルース』の雨のブルース、港が見える丘、白樺の小径、別れのブルース、メドレーを歌っています。5曲中3曲が淡谷のり子の持ち歌だったことを考えると、淡谷へのオマージュ、そして戦後を代表する「ブルース歌謡の女王」としての自負が感じられます。

また、ジャズのスタンダード曲を中心に全曲英語で歌っている『THE SHADOW OF LOVE』というアルバムには『Bourbon Street Blues』と表記された曲が収録されていますが、これは『伊勢佐木町ブルース』のジャズ・バージョンです。ニューヨークで収録された持ち歌のジャズ伴奏ライブ盤同様、このアルバムを聴いていると、まるで原点に戻ったような気持ちで歌っていたのでしょう。どの曲を聴いても、青江のもう一つの顔を堪能できます。

私の仕事場は東京・大井町にあります。昭和の匂いが色濃く残る大井町駅近くの飲み屋街、平和小路・東小路の狭い路地に足を踏み入れると、今は無きマンモスキャバレー「杯」の方角から青江の歌声が時と線路を越えて聞こえてくるような気がします。